

ROAD

輝く人たち No.26

作品作りに 終わりはない

PROFILE

平良 恒雄 (70)

宮古島市伊良部出身、浦添市安波茶在住。
1995年琉球ガラス村5代目工場長に就任。2011年沖縄県優秀技能者、2018年現代の名工受章
座右の銘：健康第一
健康でなければ作品を作ることできない。職人人生とともに歩み支えた妻へは感謝してもしきれない。

約 1400度の窯に吹き竿を入れ、巻き取ったガラスに自らの思いを込めるように「ふう」と息を吹くのは、琉球ガラス職人の平良恒雄さん(70)です。この道54年、磨き上げた技能が評価され、厚生労働省の「卓越技能者(現代の名工)」に選ばれました。平良さんが初めて琉球ガラスに出会ったのは、16歳の時。「元々は、親戚のおじさんが作った三線に感動し、三線職人になったかった」という平良さん。中学卒業後、三線職人を夢見て伊良部島から沖縄本島に渡ります。親戚の家に間借りさせてもらいながらいくつ三線工房を回りますが、なかなかいい出会いに恵まれません。それを見かねた親戚のおばさんが、自身が勤めていた沖縄ガラス製作所(当時浦添市宮城にあった)の見学を勧めます。汗だくになりながら、自由自在にガラスを形作る職人技を初めて見た平良さんは、「かつこいい！これだ！」と一瞬で心奪われ、ガラス職人への道を歩み出します。

製作所社長でした。「いわゆる引き抜きですよ」と平良さんは笑います。「大江さんは、現場のことをよく理解し、とにかくやってみよう」と、職人と一緒になって新しいことに挑戦する人だった。その挑戦から生まれたのが板ガラス(ステンドグラス)。私が今も楽しく仕事ができているのは、大江さんと共に挑戦してきた日々があるから」と感慨深げに話します。良き理解者と共に、作品作りに没頭してきた平良さん。現在は、自分の思い描く作品を作りながら工場長として後進の育成、ガラスづくり体験の手ほどきを行うなどいくつもの顔を持っています。「後輩たちや初めてガラスづくりを体験する人たちの笑顔を見ると、自分が初めて作品を作った時の喜びが鮮明に甦る。慢心することなく謙虚であることは職人にとって大事なことです。次への製作意欲につながります」その謙虚な姿勢と湧き上がる製作意欲から生まれたのが、現代の名工受章を機に手掛けた作品『島景色』。故郷の宮古に思いを馳せたという作品は、宮古の海や空、大地をそのまま詰め込んだかのような作品。『今年『島景色』シリーズで作品を作っていきたい。作品を見た人や手にした人が沖縄や宮古島に思いを馳せ、島と人をつなぐ作品になればと思う』と平良さんは力を込めます。「常に納得のいく作品が作れるわけではない。思い描いている色や模様を出すのは至難の業。しかし、形のないものを形にしていくのが琉球ガラスの醍醐味。そして、それを第三者が認めて初めて作品は完成する。作品を認められたということは、自分の思いが伝わったのだと思っている。こんなうれしいことはないですよ」とほほ笑みます。「作品作りに終わりはありません」そう話す平良さんの挑戦はこれからも続きます。

①琉球ガラス村で開催中の現代の名工受章記念作品展(3月31日まで)。「島景色」など複数作品が展示。②琉球ガラス村エントランスホールに彩り豊かに輝く板ガラス④作品を成形する平良さん。

